

“空っぽの器”という役割

松本メディカルカフェ 齋藤 智恵美

今回、初めて「第7回がん哲学外来コーディネーター養成講座」に参加させて頂きました。先生方の哲学と専門性、相手を思いやる愛にあふれたご講演を聴けたこと、参加者の皆さまの思いに触れ、生の声を聴けたことは今後の私の宝物になっていくだろうと思います。

「病気であっても病人ではない」。がん患者や病と向き合っている人にとって、病人ではない時間や居場所は思いのほか少なく、そして病人でいなければならない空間は苦しいものでもあります。しかし、自分が何かを誰かに与えることができた瞬間、私たちは病人という枠を超えてこの上なく満たされた気持ちになります。自分の哲学に気付けた時、私たちの背筋は伸び、そして言葉にして共有＝与えた時、自分の中の生きる力を感じます。

樋野先生の言葉の処方箋は私の心に揺さぶりをかけ、自分の哲学に気付く手がかりをたくさん与えて下さいました。今月22日、第1回目の「松本メディカルカフェ」の開催に向け準備を進めている私にとって、自分の“空っぽ”という役割に気付く、まさに『がん哲学外来の原点』となる養成講座でした。そして心から感動し、涙し、思いを強くした一日でした。このような機会を頂けたこと、心から感謝しています。ありがとうございました。

がん哲学外来市民学会に参加して

がん哲学外来ナース部会 岡田 坦子

今回の市民学会は私にとって初めての神戸、いろいろな方々との出会い、学びができるのを楽しみにまいりました。

樋野先生の基調講演では、がん事始めからがん哲学外来の原点、理念と話はすすみ、「大切なことは大切に」、「ユーモアを忘れず、人生の目的、品性の完成」に努めることで、「人生から期待される」生き方をするというので、私も改めて考えさせられました。また、小中高生のがん教育にも携わっているということでした。

その後の諸先生からの講演では、「病める人に寄り添い、共に生き、共にエンジョイする。肝心なことは『共に』には工夫とマナーが必要」、心すべきことと思いました。「医療関係でも情報が氾濫しているが、それに振り回されないように。なかには、市民のための情報でないものもあり、殊にインターネットの情報検索では危険も潜んでいる」という話には私も心当たりがあり、納得です。

最後の「よい医者は最後まで見る」という言葉がいつまでも心に残り、塾生や若い方々のこれからの発展を楽しみに会場を後にしました。



養成講座会場「神戸薬科大学」



養成講座に応募した全国からの受講生



パネラー「横山・竹川・多喜・安藤」先生



淀川キリスト教病院
柏木 哲夫 先生



宝塚市立病院
沼野 尚美 先生



兵庫医科大学
笹子 三津留 先生



順天堂大学
樋野 興夫 先生



テーマは「がん哲学外来の原点」



討議した後は各グループからの発表会



コーディネーター認定証の授与式